

論文内容の要旨（様式4）

報告番号	甲 第 13 号
論文名	幼児の報酬分配における公正判断と処理過程 Processes of distributive justice judgment in preschool children's reward allocation
氏 名	津々 清美
<p> 幼児が、物語の登場人物による仕事の作業量（数量）と報酬量（数量）をどのように関係付けることが公正だと思うかを検討する報酬分配の発達心理学的研究である。第Ⅰ部では、一般的な道徳的判断と報酬分配に関する先行研究を概観し、本稿の立場を述べ、5歳児に関する検討が特に必要だと議論した。 </p> <p> 第Ⅱ部では、物語の登場人物への報酬分配を5歳児がどのように行い、分配理由を述べるかを測定する方法を用いて、実験的検討を行った。実験1では総報酬量が総作業量よりも少ない、等しい、多い、の3条件と、作業量を2種用い、第三者的立場から登場人物2名に報酬を分配するよう求めた。その結果、総作業量の影響はなく、分配パターンは資源（総報酬量）が乏しいときには大半が平等分配を行うが、豊かなときは公平分配などが増え、分配理由にも条件差が見られた。ここから認知と感情が未分化な“公正感(justice feeling)”の存在が示唆された。また分配方略の分析から判断の自動処理仮説を提案した。実験3と4では、実験1に基づく仮説を検討するため、泣き顔場面を設定した実験を行った。その結果、どちらの実験でも分配パターンは登場人物の泣き顔に関係なく、分配判断は自動過程によって行われ、理由付け（正当化）は後付けの場合があると解釈された。また総報酬量が乏しいときには平等分配が圧倒的に多いという実験1～3での発見について、スピタイジングによる総報酬量の自動処理の関与があることも指摘された。実験4では、総報酬量をスピタイジングで把握可能な範囲内の偶数と奇数に設定し、また“全部使う”と“全部使っても、使わなくてもよい”という2種の教示を設定した。その結果、総報酬量が偶数のときには教示の違いに関係なく自動的に平等分配が行われるが、奇数では“全て使う”という教示によって平等分配が禁止されたとき、反応時間の極端な増大があり、また分配方略の変化もあって、制御的処理になることが示された。さらに、平等分配を禁止されていても強行する参加児がかなりおり、他の条件での反応との関係から、乏しいときには徹底的平等志向になるのが20～30%、また禁止されなければ一貫して平等分配を行うのは50～60%だと推定された。 </p> <p> 第Ⅲ部は、Ⅱ部の実験から得られた結果の総括と、発達段階説について理論的考察を行った。 </p>	